

患者を生きる

3936

職場で

不妊治療を続けてきた大阪府豊中市の社会科講師、木下優里さん(37)は今年3月、第2子をあきらめ、治療を卒業した。いまはひとりの息子の駿希くん(5)の子育てと仕事に励む。

社会科の先生になりたいと思ったのは高校生のときだ。世界史の授業にはまった。担当は宝塚歌劇の男役のようにショートカットが似合う女性の先生。板書はせず、歴史上の裏話や人物のエピソードをしゃべり続ける。ドラマを見るようにワクワクした。

テスト前に教科書を暗記するのがそれまでは勉強だと思っていた。だが、一気に考えが変わった。世界史の授業は、先生の話をはたすらメモした。帰宅すると資料集で調べ、自分なりにノートにまとめ直した。

夢だった職業についての20代は、休日も教材づくりや授業の下準備に費やした。楽しかった面もあるが、早く一人前になって周りから認められなければ、産休や育休をとった後、復職できないのではという不安もあったためだ。

経験 教壇で伝え続ける

不妊治療④

しかし、出産は年齢が上がるほど難しくなる。不妊治療を通し、努力してもかなわないことがあると痛感した。子どもを望む女性



木下さんが社会科の授業で使っている自作ノートと資料集＝大阪府豊中市

が、出産や不妊治療のために仕事をセーブしたり休んだりしても、確実に仕事に戻れる環境がもっと

整ってほしい、と願う。第2子はかなわなかったが、駿希くんは授かることができた。体外受精で妊娠し、生まれてくるまで流産しないかなどと不安は消えなかった。いま、わんぱくに成長し、来春には小学生になる。寝顔をみるたび、家族で笑って過ごせる幸せをかみしめる。

「人生、努力してもどうしようもないことが起きることもある。でも、そこから立ち上がって、どう進むかが大事や」。自身の不妊治療の経験をも糧に、伝え続けていくつもりだ。

(水戸部八美)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、
iryo-k@asahi.comへお寄せください。



「患者を生きる」は、医療サイト・アピタル (<http://www.asahi.com/apital/>) でも、ご覧になれます。